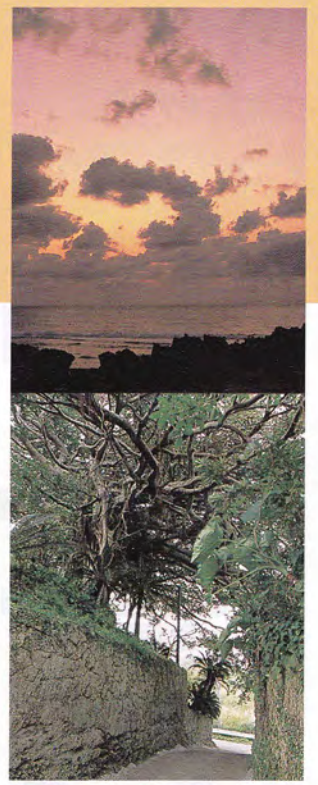
Slow Fooder' Story File *1

Feature article

国産コーヒー



今回の舞台も鹿児島県の徳之島。どこまでも続く水平線や、思わず我を忘れてしまうほどの夕陽、そして町のいたるところで見られるガジュマルの樹は人々の生活とは切っても切り離せない。取材時は島の大きな特産であるサトウキビの収穫の最盛期だった。

文●金丸弘美
Hiromi Kanamaru
写真●阿部雄介
Yusuke Abe

夢の実る木の下で

自分の手でコーヒーを作りたい——。その想いを胸に秘めて宮崎、大阪と移り住み、そしてブラジル移民のチャンスを逃してしまった吉玉誠一さんは鹿児島県の徳之島を夢の到達地点に選んだ。試行錯誤の20年が経ち、やっと焙煎できるようになった吉玉さんのコーヒーは、ちょっぴりビターで、そしてどこまでもドリーミーな味がした——。

「栽培したコーヒーを初めて焙煎して飲むので、畑まで来てくださいませんか」

そう誘われたのは、鹿児島県の奄美諸島のひとつ、徳之島でのできごと。まさかコーヒーを国内で栽培している人がいるなんて思ってもみなかった。

コーヒーを飲んだのは、雑貨店にテーブルを置いての臨時のオープンカフェ。

「20年かかって、やっとできたコーヒーなので、味はどうかな?」

そういって香りの豊かなコーヒーを出してくれたのは、ひげ面の、笑顔がたえない吉玉誠一さん（58）である。

いい香りが、まるで島のそよ風のように漂ってくる。味は、強い焙煎にもかかわらず、とても爽やかで、ゆったりした時間を過ごさせてくれる最高の贈り物であった。

吉玉さんの案内でコーヒー畑に向かうことになった。本物のコーヒーなんて、お目にかからないから、まるで初恋の人に初

「何が嬉しいって、白い花が咲くのが綺麗だし、青い葉に真っ赤な実がなることだよ」

吉玉さんのコーヒー園を訪れる人の中には、苗木を買って畑に植えていく人も。東京では、コーヒーセレクターのかのともよさんのお店「カヲリの木」で吉玉さんのコーヒーを手に入れることができる。当然在庫は少ないので欲しい方は事前にご連絡を。
TEL：03-3419-5559
http://www.kaorino-ki.com

めて口を利くみたいに、なんだか胸がときめく。

畑は、雑貨店からほど近い雑木林の間のゆるやかな蛇行した道を下ると、山のくぼみに、ぽっかりと畑が現れ、濃い緑の葉をたたえたコーヒーの木が育っていた。

枝には熟した、可憐な紅い実がなっている。1粒もいで噛んでみると、少し甘い。目を閉じると、異国の味がする。この果実のなかの種が、コーヒー豆となる。

栽培しているのはブラジルとモカ。苗木から、20年かけて育てたという。約120本を栽培し、親木はそのうち40本。そこから少し豆が採れるようになったのだ。

コーヒーの実のなった枝を触る吉玉さんの目は線になって、微笑が顔からこぼる。

実をひとつずつ摘んで、奥さんの道子さん（49）の力を借りて、コーヒーにしたのだという。水につけて、実の浮いたものより分け、果実を採り省いて豆を取り、天日で4週間かけて乾燥。それから、豆を被う皮をひとつひとつ手で剥いて、コーヒー豆が誕生した。

吉玉さんは、昭和20年、宮崎の農家の生まれ。農業が好きだったが、後を継げなくて、親の強い勧めで、やむなく大阪の鉄工所に勤めた。しかし、農業への夢はつのるばかりだ。ブラジルで農業をしようと決心し、パスポートまで取得したが、すでに移民は打ち切られた後。親からの猛反対もあって、そのまま大阪に留まった。

昭和56年、徳之島で核燃料再処理工場ができるという噂がたち、島に、本土から150名もの反対派の運動家が集まった。その仲間のひとりと知り合いだった吉玉さんは、これを機にと、島での農業を夢見て移り住んだ。こうしてブラジルへの夢は、島で土建業に携わりながら、コーヒー栽培へと託されることになった。

「今から20年前、沖縄に旅に出た。宇検島でブラジルからきたという1本のコーヒーの木があり、周りに小さな苗木があった。それを焼酎1本と交換に、100本もらいうけ、伊仙町の青年団と試験栽培したのが始まりでした」

やっと育ち始めたとき、区画整理で移植を余儀なくされ、そこからようやく根を張り始めたら、台風ですべて横倒し。それでも立ち直り、コーヒーは育った。ブラジルは、木が高く風にやられやすいからと、10年前に熊本に出稼ぎにいって見つけた低木のモカ種の苗を見つけて、これも栽培を始めた。

栽培方法は、幼少の頃に祖父からしっかりと叩き込まれたという、もともと日本に代々受け継がれてきた自然循環型の、牛の糞や雑草を堆肥に使う有機農業。

「植えてから3年で花が咲き、少し実がつく。本格的収穫には10年かかるね。何が嬉しいって、白い花が咲くのが綺麗だし、青い葉に真っ赤な実がなることだよ。今、徳之島にコーヒーを植える仲間は4名いる。全部で300本くらいにしたい。そして仲間を増やして5年後には1000本にまでするのが夢だね」

吉玉さんは、少年のような顔になった。